

今も聞こえる励ましの声

鳴海風

中学生のころ『女と味噌汁』という大好きなテレビドラマがあった。そのエンドロールに流れた原作者名「平岩弓枝」には、なぜか強烈なインパクトがあった。

三十四歳で新鷹会の門を叩き、毎月のように短篇を持ち込んで読むことになった代々木八幡宮が、平岩弓枝先生のご実家だとは、それまで知らなかった。

代々木八幡宮の講堂に自分の定席ができるようになったが、平岩先生は執筆でお忙しいから勉強会には出られないと思いついでいた。それが、ある日とつぜん、講堂に入って来られた。会員が読んでいる途中だった。電気が走ったように、私は背筋を伸ばした。

不思議なことに、先生は着席せず、ゆっくり急須でお茶を淹れて、皆の茶碗に注いで回られた。自分の茶碗に注がれたとき、深く一礼した。もう会員の声も耳に入らなかった。

伊東先生の指名で若手から順に意見を述べて、最後に、その時は着席しておられた平岩先生が当てられた。途中から来られて、お茶を注いで回られた平岩先生を指名するとは伊東先生も意地悪だと思つたが、すぐそれは私の愚かな考えだと思いつ知された。

しきだった。

幸か不幸か、私が読んでいるときに、先生の降臨はなかった。先生が長谷川伸先生の思い出を語るときは、語り口は違つた意味で熱を帯びた。

白金台二本榎の長谷川邸での出来事だったという。電話がかかってきて、当時は最年少だったのだろう、平岩先生が出られた。電話の相手は、地方にいる長谷川伸先生の熱烈なファンだった。話を聞いて、平岩先生は興奮して長谷川伸先生へ報告した。

「先生。〇〇（地名）からの電話です。旅の一座が、先生のお芝居をやっているが、どうも筋立てがおかしいそうです。先生は上演を許可されてないのでありませんか。もしそうなら、でたらめな芝居はやめろと言つてとちめてやりましょうよ」
おきよんな江戸っ子娘みたいな喋り方で、聞いている会員はみな引き込まれた。

「すると、長谷川先生は、私にこうおっしゃったのです。平岩君。その旅の一座は、私の作品でお芝居をして、その日のおまんま（ごはん）にありつけているのです。私は自分の作品がそうやって人の役に立つことがうれしい。もし文句を言ったことで、一座が興行をできなくなつたら困るだろう？ 電話してくれた人には、よくお礼を言つて、でもどうかそつとしておいてあげてほしい、私がそう言つていたと伝えてくれ」

長谷川伸先生のエピソードを語りながら、人間を書くとはどういうことか、平岩先生らしい伝え方だつたと思う。

平岩先生の直接の指導を受けたことはなかった私だが、毎年の長谷川伸の会や、外で作家が集まる場などで、たまに言葉をかけてくださることがあり、どうやら拙作はどこかで目にしておられたらしい。

作品は恋愛小説だった。先生が作者に質問された。

「二人が食事しているレストランのテーブルの上には花が飾つてありましたか？ それは生花でしたか造花でしたか？ テーブルクロスの色は何色でしたか？……」

どれも作品の中に書かれてなかった気がする。作者はすぐに返事ができなかった。

なぜそんな質問をしたのか、先生が解説を始めた。

最初はおだやかだった先生の口調が、まもなく早口になり、江戸っ子のべらんめえ調を連想させた。

「あなたは、湖のほとりの洒落たフランス料理のレストランだと書きました。とても素敵な設定だと思いました。でも、あなたは、二人にビールを注文させた。さらにボーイは缶ビールを運んできた。だから、さっきのように質問したの。湖のほとりの洒落たフランス料理のレストラン。あなたは文字を並べただけで、真剣に舞台づくりをしていない。だから私の質問に答えられない。作者はすべてを知つていて、その中から書くべきことを書く。作家つてそういうものよ！」

読まれていたのが時代小説のこともあった。先生は、時代考証の間違いを指摘された。まるで専門書を読み上げるような詳

「〇〇先生（某小説家）が、あなたの作品をこうおっしゃつてましたよ……」

他人を利用した遠回しのコメントをくださり、最後はいつも信じられないようなお言葉で結ばれた。

「色々な批評にさらされるかもしれないけれど、あなたはいつか大きな賞を取る人だから、めげずに頑張りなさい」

当時の新鷹会では、私は若輩組で、その上遠方組だった。名古屋からさらに一時間も遠いところから通つていたので。ひたむきだったが、思いつめたような表情をしていたのかもしれない。手厳しい指導ではつづれてしまうと心配した伊東先生が、陰で助言をしてくださつていた気がする。

とは言え、期待と言つたらおこがましいが、とにかく平岩先生の励ましのお言葉は、ずしんと腹の底に落ちていた。

しかし、新鷹会に入つて三十五年、そのお言葉に応えられないでいるうちに、平岩先生はお亡くなりになつてしまつた……、とがっかりしていたら、今度は頭のとっぺんから江戸っ子娘の声が降つてきた。

「なに、情けないこと言つてんのよ。愚痴をたれてるひまがあつたら、さあさあ書いた書いた。書かなきゃ誰も読んでくれないし、まして感動して褒めてなんかくれるもんか」

お亡くなりになつても、平岩先生は、ひたすら私に励ましの言葉をかけ続けてくださる。

合掌